れたらいいんだけど、そういうわけにはいかなくて。けど、そういうことなんだと思うの」
　漠然とした表現が、レストランの話の続きだということに気づく。
「そやけど……、私なんかに何ができるかな。そもそもそんな資格があるやろか――」
「二人には、この島で生まれ育ったっていうアイデンティティがあるじゃない」
「ほんでも、俺らが何かしたわけじゃないし――」
「二人が直接何かしたわけじゃないけど、ちゃんと関心持ってるし、二人につながるおじいちゃんやおばあちゃんたちは頑張ってきたわけだし」
「それはそやけど――」
　冷静に考えれば、すぐに同調できないのは当然だ。だからといって、すぐに引き下がってしまうことも躊躇われ、渚は続けた。
「ダークツーリズムって知ってる？」
「ダーツ？」
「ダーツじゃなくて、ダーク」
　弘章のボケに美海が、馬鹿、と突っ込み、場が和む。
「ダークっていう言葉のニュアンスはあんまり好きじゃないけど、ダークツーリズムって、人類の負の遺産を巡る旅のことなのね。瀬戸内でいえば、ヒロシマの原爆ドームとか、ハンセン病療養所とかがあるんだけど、そこには、歴史に埋もれてしまわないように活動してる人たちがいて、そんな人たちとネットワーク作りながら、今を変えていけないかと思ってて。二人にも、そんな人たちと出会ってほしいの。じゃないと本当に、終わりの始まりになっちゃう気がするの」
「ほやけど、私ら、この先ずっとここにいるかどうか分からんし――」
　現実の問題だ。
「ううん、今すぐってわけじゃない。ゆっくりと、時間かけてやっていければ」
「ということは、この島で生きていくということやな」
「何して生きていくん？」
「漁師？」
　美海の問いかけに弘章が返す。
「ヒロはそれでもええやろうけど」

「俺やって」
「観光だけやったら無理やで」
　観光資源の真ん中で、それと同居生活をしているかのような環境に身を置いているからこそ分かる実感だ。
　観光は世情に大きく左右される。それはまるで泡のような存在。膨れるときは想像以上に、膨れすぎるくらいに膨れ、島の住民としての生活が立ちゆかなくなることもある。それに、観光客が多く訪れたところで、直接収入を得られる島民は一部で、遍く島民が収入を得られるというわけではない。しかも、事故だの病気だのと問題が起きることも多々ある。だが、島という特性上、公的な治安や医療はすぐに受けられないというリスクは常に残り、公的なマネージメントは十分とは言えない。
　また、天候や世情によっては、頼りにしていた観光資源に頼れなくなり、結果的に大打撃を受けることになる。つまり、泡のような存在なのである。それを美海のひと言が物語っていた。
「うん。それが、全国共通の、観光過疎地の問題なの。だからって観光や政治やお役所頼みにならずに、自分たちで自立して生きていけないかって思うの。今の、これからの身の丈に合った、持続可能な水準で生きていくの。都会と同じような贅沢はできないかもしれないけど、都会にない贅沢ならできるんじゃないかって」
「なんか、難しいな」
「分からんこともないけど――」
　やはり高校生には無理なのか、と渚は口を噤んでしまった。まだ子ども気分が抜けないところに、次の進路に追い立てられ、周囲からの同調圧力もある中で自分の将来を描くことが難しいことは、数年前の自分をふり返ればすぐに思い至る。
　ただ、動機づけはある。渚と同様、この二人にもはっきりとある。それにきちんと向き合うことさえできれば可能性がないわけではない。いや、むしろこの島の遺産の継承を考えたとき、是が非でも協力者として求めたい。
　なんとか――、と思う。
　目の前の砂浜に打ち寄せては引くさざ波を、じっと見つめる。
　一方で美海と弘章も混沌としていた。渚のいる手前、否定的な言葉も出しづらい。かといって、すぐに同意できるような話ではない。ただでさえ進路がはっきりと定まらず、悩みや不安を抱え込んでいたところへ舞い込んできた話だ。しかもこの島のこ

ととなると、あまりにも大きすぎて、自分たちが手をつけていいものかと足が竦む思いになる。
　気がつけば足元の砂に、小さな木の欠片で、訳の分からない絵を描いていた。
　空に浮かぶ雲の白が、わずかに赤く色づきはじめていた。

「渚さんて、何か、ええ人やな」
　渚の乗った高速艇を岸壁で見送りながら、弘章が小さく言う。美海が、うん、と小さく応える。
「ほんまにまた来るんかなぁ」
　弘章が不安を感じていたことが、美海に伝わる。
「来るいうて言うたやん！」
　美海はすでに信じ込んでいた。人の言うことをすぐに信じることは危険だということに気づく。が、同時に、渚の発する言葉に嘘は感じられなかったとも思う。
「またＬＩＮＥするんやって」
「えっ、なんでＬＩＮＥ知っとん？」
「ほやって、交換したもん」
「えーっ！いつの間に」
「ヒロがトイレに行っとる間に」
「なんで？俺は？俺は？」
「さあね」
「俺にも教えてや」
　言い合う二人に航跡を残しながら、高速艇は遠ざかっていく。

　船内はやっぱり観光客で満員だ。冷房が効いて涼しい。
　船尾の窓から見える航跡の先に、美海と弘章が小さく見える。初めは手を振っていたが、今は何やら楽しそうに話しているように見える。
　二人を自分の思いに引き込んでいいものか――
　離れていく島をじっと見つめる。
　たった二日の出来事が、ひどく大きなことのように思えた。旅をするたびに思い知らされる。今まで生きてきた世界の小ささと、新しく開けた世界の大きさ。その狭間

で、自分の進むべき道はどこかといつも佇んでしまう。佇みながらも、やはり一歩を踏み出すのは、人との出会いだと思わせられる。

島を西側に回り込みながら眺めていると、少しずつ姿を見せはじめた。昨日見た産廃事件現場。ここを舞台に、長年にわたり、壮絶な闘いが繰り広げられた。ときには裏切られ、ときには罵声を浴びせられた。子どもは理不尽な扱いを受け、年寄りは悔し涙を流した。島に関わるというだけで、人としての尊厳を何度も何度も踏みにじられてきた。数多の涙が流された。命が奪われてきた。

こんなことがあっていいの――

やはり思う。なんとかしないと、なにかできないか、と。

南側に回り込み、島の全景が目に入る。緑に包まれた小高い山から覗く、いくつもの切り立った岩壁が、西洋の朽ちた城のようにも見える。

昔見たアニメ映画に出てくる、空に浮かぶ島のよう――

海に浮かんだ島はまるで、空に浮かぶ島がそのまま海に降りてきたように見えた。

石と水の豊かな島。滅びと再生。思いがけずそんなことを思った。

＊

島を離れてからも、渚は頻繁に二人と連絡を取り合った。それは、熱心に誘うというよりも、いま何を学んでいるかといった内容や、気になるニュース、そして休みのたびに出会った人や、訪れた場所について伝えるものだった。

あるときは、ゼロウェイスト活動をしている町を訪れたこと。

あるときは、平和活動をしているカフェに行ったこと。

あるときは、アイヌ民族の自然と共生するニュースについて。

またあるときは、被差別部落の命や物を無駄にしない生活観について。

それらは、高校生の美海や弘章の日常にはなかったテーマだった。あったのかもしれないが、少なくとも意識下にはなかった。だから渚から送られてくるメッセージは、同級生とする話題とは明らかに異なり、常に新鮮に映った。

しかもそれらは、学校でたまに勉強する堅苦しい学習とは異なり軽快で、スッと入り込んでくるものだった。

環境や防災、平和、人権といったテーマは、それぞれ個別の問題ではなく、人類社